

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（一一）

蘭 部 寿 樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（二三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一（明治書院、二〇〇二年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記原文には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（三） 応永二三年（二四一六）分 『米沢史学』

三〇号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇号・『山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二号（二〇一四～一五年）

○現代語訳（四）～（六） 応永二四年（二四一七）分 『米沢史学』

三一号・『紀要』五一号・『生活文化研究所報告』四三号（二〇一五～一六年）

○現代語訳（七）～（九） 応永二五年（二四一八）分 『米沢史学』

三二号・『紀要』五二号・『生活文化研究所報告』四四号（二〇一六～一七年）

○現代語訳（一〇） 応永二六年（二四一九）正月一日から四月二九日まで。『米沢史学』三三三号、二〇一八年

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永二六年五月一日から八月

三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（二）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに原文に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものはない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七（明治書院、二〇〇二～二〇一四年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記方寸考―」（同『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

松蘭斎『看聞日記』に見える尼と尼寺」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二七号、二〇一二年）

同「室町時代の女房について―伏見宮家を中心に―」（愛知学院大学人間文化研究所紀要『人間文化』二八号、二〇一三年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」(『中近世の領主支配と民間社会』、熊本出版文化会館、二〇一四年)

(応永二十六年) 五月一日、晴。「すべてのことがとても幸せである」と予祝した。いつものように月初めのお祝いをした。

四日、晴。いつものように、屋根に菖蒲を葺き刺した。薬玉をいつものように清原常宗を通して室町殿へ差し上げた。若君にも同じく薬玉を内々に室町御所女房を通して、差し上げた。鳴滝殿御稚児御所へも同じく差し上げた。これは初めてのことである。その他にも例年の通り、薬玉を贈った。

足利義満の肖像画を供養する法会

聞くところによると、今日、相国寺でお経を略読して鹿苑院故足利義満殿の肖像画を供養する法会が行われたそうだ。この肖像画の義満殿は出家した姿で、目をつむり(※)あぐらをかいているという。鹿苑院主が導師となって供養なさったそうだ。

夕方、取り次ぎ役の清原常宗から返事が来た。室町殿は「毎年相変わらず薬玉をお祝いで下さり、うれしく存じます。ありがとうございます。そのように、よくよくお伝えするように」と仰っていたそうだ。若君からのお返事も同様であった。

陰陽師賀茂在弘の死

【頭書】(『日記の上方の隙間に書き加えた記事) 今月二日に陰陽師の賀茂在弘が亡くなったそうだ。とてもかわいそうなことである。

※「目をつむり」：原文には「転眼」とある。
五日、晴。「端午の節供で、とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。風

呂に入った。その後、いつものように節供のお祝いをした。
六日、晴。等持寺法華八講の最終日だそうだ。この法会は二日から行われていた。

源氏物語の読書会

さて源氏物語については無学なので、桐壺の巻から順番に読んでいく。この読書会は宮家の女性たちや田向長資朝臣が主催して、庭田重有朝臣が音読している。毎日読んでいるので、合間に食べる軽食を侍臣や女房たちが当番で用意しているそうだ。

大工の源内次郎が来て、琵琶三面を修理した。

十九日、晴。今夜は朝廷で内侍所御神樂が行われたそうだ。綾小路信俊前参議が参列したという。

世尊寺行豊から源氏物語を借りる。

二十日、晴。世尊寺行豊朝臣が来た。伏見宮家で源氏物語の本を全巻持っているわけではないので、行豊朝臣が持っている本を少し借りだした。最近、毎日、源氏物語を読んでいる。その内容は多すぎて、ここに書くことは出来ない。

源氏物語少女の巻

二十三日、晴。源氏物語の少女(おとめ)の巻を読んだ。世尊寺行豊朝臣や行蔵庵主寿蔵主も源氏物語の音読を聞いていた。お酒を飲み、その後、蹴鞠をした。行豊朝臣や広時らも蹴鞠の参加者に加えた。

中国・南蛮・朝鮮の攻撃

さていま聞いたところによると、大唐国や南蛮、高麗などが日本に攻め寄せて来るそうだ。高麗から宣戦布告があったらしい。室町殿はびつくりなさったそうだ。

日本は神国

でも日本は神国だから、たいした事はないだろう。

二十五日、小雨が時々降った。冷泉正永が来た。今日は恒例の連歌会である。祐誉律師が当番の幹事なのだが、やってこない。その代わり祐誉は、発句とお酒一献分の銭を送って寄こした。連歌会の参加者はいつも通りである。夕方に百韻を詠み終わった。

聞くところによると、長講堂を修理するよう命令があったそうだ。朝廷の取り次ぎ役は広橋兼宣、工事責任者は結城満藤越後入道だそう。

二十六日、晴。冷泉正永が伏見宮家に滞在しているので、双六をした。田向長資朝臣が勝った。負けた者たちが酒宴を用意した。その後、連歌を五十韻詠んだ。

京都、六条道場全焼

今夜、火事があった。後で聞いたところによると、焼けたのは六条道場だそうだ。仏殿や鎮守社もすべて残らず全焼したという。

二十八日、晴。島田益直六条庁官が言うには、長講堂の修理はこの二十一日に結城満藤入道が大工たちを召し連れ簡単な食事をとらせたという。総工費は三千七百貫文だそうだ。それに充てるための田地に懸ける臨時税、その収納幹事は清秀定和泉守だそうだ。

先日の連歌の残り五十韻を今夜詠んで、百韻とした。

六月一日、晴。朝早くいつものように愛染明王堂に参詣した。庭田重有・田向長資朝臣をお供に連れて行った。

二日、終日、雨が降った。その間、皆で和歌を百首詠んだ。

琵琶法師の椿一検校

四日、晴。琵琶法師の椿一検校が来て、平家物語を二、三句語った。

聴衆が大勢集まった。賀茂神社の責任者に惟教朝臣が再任されたそう。

五日、晴。永円寺の住職が来たので、会った。すぐに出ていった。

住心院豪融僧正の嘆き

住心院豪融僧正が来た。父・大通院の葬儀以来、初めてやって来た。近年は美濃国にひっそりと暮らしていたが、この四月に京都へ戻ったそうだ。「深基僧正が亡くなったことで、さらに元気もなくしてしまいました。老後の身として、どう過ごしてよいものか、歎いております」と言っていた。かわいそうなことである。少しではあるがお酒を勧めた。その後、帰っていった。

六日、雨が降った。風呂に入った。行藏庵主寿藏主が仏事として風呂を焚いてくれたのだ。椎野寺主がやって来た。

七日、雨が降った。今日の祇園会は、雨だったが、特に問題もなく行われたそうだ。椿一検校が来て、平家物語を語った。

長講堂のお供え米

島田益直六条庁官が来た。後小松上皇様直筆の命令書と長講堂の事務取扱者である土御門資家の書状などを持って来た。「宣陽門院の御仏事にお供えする米のことについて、仏事を担当する長講堂の僧侶たちが二度も訴えてきた。いずれにせよ怠ることなく、お供えの米を出しなさい」ということをお命じになった命令書であった。

それに対して、「今年の分は未納分がないようにお供えのお米をお出しします。そのために、いくつかの特別納税の名田（※）や租税を未納している領地に対して、長講堂に対するお供え米を全部納

入しなさいという内容の、法皇様のご命令書をお出し下さい」というお返事を申し入れた。その詳しい内容を、長講堂の事務取扱者に伝えなさいと、島田益直に命じた。

※名田（みようでん）：所領における徴税の基礎単位。

播磨国国衙領の領地調査

十日、晴。播磨国国衙領（※）の領地調査について、その後、何も連絡がないので、何度も事務担当者に命じて、現地管理者に催促させた。それで、事務担当者の勧修寺経興朝臣は、今日、赤松義則の京都屋敷へ行った。赤松義則入道と会って話したところ、「必ず調査を実行させます」と赤松は承諾したそう。勧修寺経興が初めて赤松の屋敷に行つて、先方から「いい加減なことはしません」という返事を引き出したのは、まずはめでたいことである。

※国衙領（こくがりよう）：各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているので、荘園と同じような私領になっている。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。十一日、雨が降った。廊御方に若い女性の客人が来た。故西大路隆仲卿の娘だそう。光昭院良寿房も同じく来ていた。客人が若い女性なので、宮家の他の者たちには会わせなかった。北畠家の女房である対御方に養育されており、その対御方の部屋で暮らしているそう。

源氏物語の野分・行幸を読む

十二日、晴。源氏物語の野分と行幸などを読んだ。

さて、宮家の男らが皆、和歌の練習をしている。この五月から今日に至るまで、皆で三百首の和歌を詠んだという。和歌の練習をす

るのは、宮家に仕える男として当然のことである。

十五日、晴。夕方ににわか雨が降った。西大路隆富・冷泉正永・祐誉律師らが来た。毎月恒例の連歌会をした。当番の幹事は、隆富である。

連歌の会場

連歌会場を少し整えた。西表の柱間四間の部屋と常の御所とを隔てている障子を取り払い、柱間を合計八間に広げた。屏風二双（四隻）を南北に立て廻した。その北側の屏風一双に北野天神の画像を西向きに懸けた。この画像は、妙法院主がお描きになったものである。梅の木を描いた二枚の脇絵を、天神の両隣に懸けた。天神の前に机を一つ立て、その上に花瓶や香炉などを置いた。天神の左脇、南側の屏風一双には、寒山・拾得の絵二枚を懸けた。その前にも机を立て、花瓶を上においた。連歌の参加者は会場の西南の位置に座った。ただしその内、村人の参加者たちは、縁側に座った。

まずいつものように一献の酒宴があった。祐誉律師は、酒宴が始まる前に退席した。幹事の隆富は、酒宴が終わってから退席した。この両人は連歌が未熟なので、連歌会が始まる前に退席したのである。連歌会参加の面々は、椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・正永・即成院善基・行光・禅啓らであった。午後七時近くになつて、百韻を詠み終わった。いつもより早く済んだ。

田向長資の妻が男子を出産

さて聞くところによると、長資朝臣の妻がたった今、男子を無事出産したそう。

今夜、上皇御所で説教談義の法会があったそう。鹿苑院主がい

らつしやった。室町殿も同じくいらつしやったという。

連歌の勝負

十六日、晴。台所で連歌をした。冷泉正永が伏見宮家に滞在しているので、田向三位らが主催したそうだ。この連歌は賭け事勝負で、良い句を詠んだ者を勝ちとした。負けた者たちがお酒を振る舞うことになったらしい。私が勝負の判定をすることになった。こういうことをするのは考え物だが、記録に残さず今だけの詠み捨ての勝負だというので、判定を引き受けた。私の判定に基づいて、正永の五七五の長句とそれを承けた田向三位の七七の短句が勝ちとなったようだ（※）。負けた者たちがそれぞれ酒海という大きな酒壺を持つてきた。私が判定をしたのはおこがましい事であろうが、面白かった。

※「勝ちとなったようだ」：原文では「勝つと云々」とある。貞成自身が判定しておきながら「云々」という伝聞表現があるのは文章としてはおかしいが、この勝負事に貞成が主体的に関わったつもりではないという心情を強調してのことであろう。

十七日、雨が降った。正永が京都へ戻ろうとした矢先、雨が降ってきたので、このまま伏見宮家に留まることになった。その正永の心中を察して一首。

帰るさを 急ぐ折節 降る雨に いとど伏見の 里や住み憂き
今日もなお 泊まれと思う 心より 障りの雨は 降るぞとを知れ
正永の返歌

帰るさを 更に急がぬ 心とは 知りてや雨も 降るらん
朝夕に仕へて住まむ 里なるを

かりに伏見は 本意ならぬ身よ

風呂に入った。その後、一献の酒宴を少し開いた。昨日、お酒を用意した面々に対するお礼である。連歌を懐紙一折り分だけ行つた。発句を詠む者を籤引きで決めた。それで椎野寺主が発句を詠み出した。皆も興に乗って、百韻まで詠む勢いだつた。午後五時から午後九時まで、百韻を詠んでしまった。

貞成に男児誕生

さて我が妻二条局が、産所となる実家の庭田家に移つた。移つてすぐ、午前三時に男児を出産した。安産だつた。皆がお祝いを言つてくれた。田向三位がすぐに祝いの酒を持参してくれた。

十八日、晴。男児出産に関する占いの結果を、土御門泰継陰陽頭が送つてきた。正永が帰つていった。

船遊び

十九日、晴。船遊びをして面白かつた。これは数日前に田向三位に命じて用意させておいたことである。私・椎野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸が船に乗つた。主だつた村人の禅啓らもだいたい皆、来た。網を引いて魚を獲つた。鱸が二、三匹獲れた。たいへん楽しかつた。

船上で詠み捨ての連歌をした。発句は田向三位が詠み出した。懐紙一折り分が終わつてから、一献の酒宴が数献も続いた。さらに酒盛りとなつて、乱舞もした。月がようやく河面にでて、とても趣深い景色だつた。午後十一時に船を廻して着岸し、宮家に戻つた。御所でもまた一献の酒宴をした。獲れた鱸を宮家の女性たちへのお土産とした。

恵舜蔵主の三回忌

二十日、晴。夜に雨が降った。今日は、栄仁親王の息子である故惠舜藏主の三回忌である。禅照庵で仏事があつた。東御方や廊御方が禅照庵に参列した。行藏庵主寿藏主が仏事を主導したそうだ。

二十一日、晴。椎野寺主が一献の酒宴を準備した。我が男児誕生の祝宴だという。禅啓や広時も同じく祝い酒を一献分、用意してくれた。酒宴を重ねて、お祝いをした。

男児のお湯始めの儀式

陰陽師の土御門泰継朝臣が来た。今日は我が男児のお湯始めの儀式の日である。占いの報告書を持参したが、お祝いに来たという。御前に呼んで、対面した。お湯始めにあたり、我が子の健康を祈禱してくれた。殿上の間で泰継に酒を飲ませた後、退出していった。泰継にお湯始めの儀式に奉仕した褒美を与えるべきである。しかし、すべてのことを簡略して行うことにしているので、褒美も省略した。残念である。

伏見の土倉である宝泉がお酒一献の分として酒樽などを献上してきた。お祝いがただただ重なるばかりである。芝殿もお祝いに来てくれた。

聞くところによると、室町殿は今日から石清水八幡宮にお籠もりになったそうだ。

公家従者の青侍と將軍近習の喧嘩

二十三日、晴。たつた今聞いたところによると、この二十日に三条公光大納言に仕える侍が一条大路と室町小路の交差点で喧嘩をしたという。侍二人が討死し、それ以外に怪我をした者がでたそうだ。

事の発端は、次の通りである。將軍のお側近くにお仕えする関口

は、髻（もとどり）を束ねる紐を売る商売もしていた。そこで三条家の侍である掃部助がその紐を注文した。

ところが商品の紐がいくら待っても届かないので、掃部助が下女を関口のところにつかわし、責め立てて悪口を言わせたそうだ。それに対して、関口はその下女を殴ったり蹴飛ばしたりして、さらには下女の髪の毛も切り取ってしまったらしい。

下女は帰って掃部助に泣きついたので、掃部助たちは加勢を求めに三条家へ走っていった。その途中で、紐屋の主である関口とその若い従者たちと出くわした。関口たちが問答無用で矢を射かけてきたので、掃部助は太刀を斬りめぐらして、関口の従者ら三人を切り殺した。その上で、関口本人と差し違えて、互いに死んでしまったという。

そこへ三条家から掃部助の同僚たちが駆けつけ、また関口方にも大勢が加勢に来て、合戦となった。両方に死者や負傷者が大勢出た。さらに関口の手勢は三条家へ攻め寄せようとした。ところが三条家に吉良家を加勢して大勢が集まり守りを固めていたので、結局、関口方は攻めかからなかったそうだ。

足利義持、三条家を褒める

室町殿はこの事件のことをお聞きになり、関口を厳しくお咎めになり、逆に公家の三条家をお褒めになったそうだ。公家に仕える侍として名誉なことだと、大勢の人が褒め称えたという。

貞成男児のお七夜

今夜は、息子の生後七日目の祝いの夜である。廊御方・芝殿・田向三位らが産所である庭田家に行き、お祝いの儀式をしたそうだ。

二十四日、雨が降った。「長講堂への供米納入に関して、特別納税の名田を管理している人々の名簿を作成し、その名簿を上皇御所へ送りなさい」と、長講堂の管理者を通して後小松上皇様がお命じになった。

この事に関してはいろいろと面倒な事情がある。そこで、「伏見荘の追加納税の田地、特別納税の田地、寺庵や荘官などへ給与として与えた田地、そのすべてに対して、長講堂への供米を分割して納入するように、上皇様の命令書をお下し願います」と申し入れた。島田益直六条庁官にその内容を理解させて、命令書発給の準備手続きに入るように命令した。

二十五日、晴。北野天満宮奉納の和歌を各人が三首ずつ詠んだ。それらの和歌を今日皆に披露した。その後、連歌を詠んだ。参加者はいつもの通りだった。皆等しくお酒一献分の銭や酒樽などを献上してくれた。いい機会だったのでうれしく、早速一献の酒宴をした。夜に入って連歌百韻が終わった。

異国の軍勢襲来の前兆

さて中国人が攻めてくると噂になっているそうだ。出雲大社では本殿が震動して血が流れ出したという。また西宮の荒戎宮も震動したそうだ。軍兵数十騎が広田神社から出陣して東の方に向かったという。その軍兵のなかに女性の騎馬武者が一人いて、その者が大将のようだった。その様子を広田神社の神人が目撃しており、その後、その神人は発狂したという。

広田神社から朝廷に報告があったので、白川資忠神祇伯二位が広田神社に向かい、事の実否を調べたそうだ。これらが異国の軍勢が

攻めてくる兆しであることはもちろんのことだろう。

また二十四日の夜には、石清水八幡宮の鳥居が風に吹かれて倒れてしまった。それは同宮若宮の御前の鳥居だそうだ。そのために細橋（ささやきばし）が粉々に砕けてしまったそうだ。それはちょうど、室町殿が石清水八幡宮にお籠もりになっている時だった。それで、たいへん驚かれたそうである。そのために室町殿は諸門跡や諸寺院に祈禱するようお願いになったという。

二十七日、晴。豊原郷秋・同敦秋が来た。私に息子が生まれたことを祝ってくれた。音楽会をした。平調の万歳楽・三台破・三台急（三返の残楽）・甘州・五常楽急（三返の残楽）・太平楽急（三返の残楽）・林歌、盤渉調の蘇合急・輪台・青海波（三返の残楽）・千秋楽を演奏した。

敦秋は笛も吹くと聞いていたので、吹くように頼んだ。笛はこちらから提供した。最初は断っていたが、何度も吹くように命じたので、笛を吹くことになった。三台急から後、そして盤渉調の曲などで、合計八曲で笛を吹いた。敦秋の笛の技量は問題なさそうだ。初めて敦秋の笛を聞いた。田向三位が太鼓を打った。音楽会が終わってから、殿上の間で酒宴となった。

昨日、石清水八幡宮では舞楽があったそうだ。

中国人と海戦という噂

二十九日、晴。北野天神の御霊が西方を指して飛んでいったそうだ。御殿の扉は開いたままだったという。諸々の神社で起きている怪異には驚き入るばかりだ。

襲来する中国人先陣の軍船一、二艘とすでに合戦となっているら

しい。大内の若い従者二人が大将となつて海上で応戦し、中国の軍船を退治したそうだ。それ以前にも、神様の軍勢がおめでたい前兆を示しているとの報告があつたという。

【頭書】中国人との合戦は本当の話なのかどうか、分からないらしい。最近の噂話には誤りが多い。

三十日、雨が時々降つた。風呂に入つた。六月祓えである。綾小路信俊前参議が来た。近年は佳例として六月祓えの茅輪を作る係を綾小路が勤めている。彼が一献のお酒を持参したので、飲んだ。

七月（一日）、「秋の初めの日で、とても幸せだ、幸せだ」と予祝した。いつものようにお祝いをした。音楽会をした。盤渉調の曲を八つ、朗詠を二首。長資朝臣が笙と太鼓を兼ねて演奏した。綾小路前参議は、いつものように笛を吹いた。

二日、晴。夕方、にわか雨が降つた。宇治川が大増水した（※）。特に指月庵の前あたりで、宇治川の水がわき上がっているそう。

聞くところによると、賀茂山（※）の森の木が数十本枯れたそう

だ。音楽会をした。高麗楽の曲九つと朗詠二〜三首。綾小路信俊前参議が参加した。

※「大増水した」：原文には「龍騰」（りゅうとう。龍がのぼる）とある。

※「賀茂山」：上賀茂神社境内の神山（こうやま）のことか。

三日、晴。昼ににわか雨が降つた。音楽会をした。黄鐘調の曲七つと朗詠、次に催馬楽の安名尊・席田、その次に長保楽急・林歌・青海波。さらに別の調子に変えて演奏することなども行つた。綾小路前

参議と長資朝臣（太鼓担当）が参加した。

春日大社の御師

春日大社の御師が瓜一籠を献上してきた。

伏見宮家の領地のことで申請することがあるので、領地の目録を送つた（※）。

※「送つた」：誰に送つたかは記載がない。後小松上皇が足利義持宛てであろう。

朗詠の秘曲伝授

四日、晴。さて朗詠の秘曲を私に伝授したいと、綾小路信俊前参議が去年から頻りに言ってくる。練習してまだ日が浅いので、秘曲を受け継ぐには全く能力不足である。そのような恐れがあるので辞退したのだが、綾小路はただただ伝授しますと言う。あまり強く辞退するのは返つてまた師匠の命に背くことになるので、伝授を受けることにした。この伝授は、もともと内々の儀である。

伝授の儀式。客殿に屏風を立て、それに西園寺家の妙音天絵像を写したものを懸けた。机を一つ立てて、その上にお供え物と香炉と花を置いた。南面の妻戸や格子には御簾を垂らした。

開始時刻の午前九時になって、小狩衣と大口袴を着て私が客殿に入った。次に重有朝臣を遣わして、綾小路前参議を私の前に呼び出した。まず本尊の妙音天に焼香した。次に秘曲「傳氏巖之風」（※）を伝授されて、私は座を立つた。師匠の綾小路前参議も同じく座を立つた。

次に三献の酒宴でお祝いをした。綾小路前参議には特に褒美として馬一頭を与えた。ただし、この場では馬が調達できなかったので、

女房奉書（※）の形で馬の贈呈目録を書いて渡した。その一方で、私からもその旨を話しておいた。儀式が終わって、綾小路前参議は帰っていった。

最近、長資朝臣が雅楽を再び始めるようになったのは、もっとも喜ばしいことである。

※傳氏嚴之風：『和漢朗詠集』丞相六七九。

※女房奉書（にようぼうほうしよ）：主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた書状。主人自身が出すこともある。

六日、晴。上皇御所での御花合わせあり、そのためいろいろな方々から伏見の花をいただきたいと要望があった。縁がある者に対して、それぞれ花を送ってやった。今出川家からもご要望があったので、花瓶一瓶を送った。明日は伏見宮家でも七夕の花奉納を行うつもりである。いろいろな方々から花が掻き集められており、当方の分さえも花のあてが付かず、困った次第である。

七夕花合わせ

七日、晴。七夕で奉納する草花を少々集めた。客殿に屏風を立て、その屏風に中国風の絵画を四、五枚懸けた。厨子や違い棚などに置物を飾っておいた。花は花瓶十二瓶に立て並べた。特に飾り立てたわけではなく、たださりげなく整えたのみである。花を献上した人々は次の通り。

私花瓶三瓶（銀製の花瓶・金めっきした花瓶・茶碗形の花瓶）・綾小路三位（田向経良）一瓶（草花をさした茶碗形の花瓶）・重有朝臣一瓶（青銅製の花瓶）・長資朝臣一瓶（青銅製の花瓶）・善基一瓶（青銅製の花瓶）・禅啓一瓶（青銅製の花瓶と盆）・行光一瓶

（青銅製の花瓶と盆）・良村一瓶（青銅製の花瓶と盆）・有善一瓶（茶碗形の花瓶と盆）・宝泉（青銅製の花瓶と盆）。以上。伏見荘内の寺庵などからは集めなかったもので、草花は献上されていない。

七夕梶の葉法楽

朝早く、梶の葉に和歌を書いて奉納した。次に大光明寺に参詣した。焼香してから、長老と会った。お茶でもてなされた。干飯や瓜などを食べた。田向三位・重有・長資ら朝臣も一緒だった。宮家に帰ってから風呂に入った。その後、いつものように節供のお祝いをした。

その後に音楽会をした。盤渉調の曲七つと朗詠などを、特に七夕へ奉納した。音楽会には、田向三位（太鼓を打った）と長資朝臣が参加した。夜になって、少し詠み捨ての和歌を詠んだ。

さて上皇御所の御花合わせは厳めしく行われて、献上された花もさらに増えたそう。西園寺家や徳大寺家からも花が献上されたという。今出川公行前左大臣は花瓶二つを献上したそう。上皇御所の音楽会では、採桑老・万秋楽破・蘇合三帖・蘇合三帖急・秋風楽・輪台・青海波・千秋楽が演奏された。演奏者はいつもの通りだそう。ただし、徳大寺実盛中納言と中山定親中将は初めて参加したという。

八日、小雨が降った。花合わせの座敷は、昨日のままにしておいた。連歌会をした。花を愛でるために行ったのである。参加者はいつもの通りである。

惣得庵主は八十数歳

夜になって、惣得庵主が来た。今年の春以来、宮家にはずっとお

出ではなっていないかった。年老いて脚気を患い、起居がままならないという。既に八十歳を越えているので、老衰するのも道理ではある。しばし雑談して、酒を飲んだ。その後、私の妻子がいる庭田家の産所に向かわれたそうだ。

九日、晴。豊原郷秋が来た。上皇御所での七夕音楽会のことを話してくれた。音楽会は明け方に始まり、翌八日の午前九時半に終了したという。参加者はいつもの通りだった。ただし松木宗宣前中納言・楊梅兼邦卿・四条隆盛朝臣・中院光相朝臣・松木宗継朝臣らは不参加だったそうだ。寢殿の御座敷を飾り立てて、前の方を公卿の座席とした。そこには、名のある御箏が十二張も並べ立てられていた。その中には、私が献上した「梨」という名の箏もあったらしい。そのすばらしさに目を奪われたと郷秋は語っていた。

音楽会をした。一越調の曲七つ、ついで黄鐘調の曲五つと朗詠などをした。長資朝臣が太鼓を打った。

十日、晴。昼には雨が降った。法安寺住職が酒樽を持参してきた。また田向三位も酒樽を持ってきた。それらの酒樽で酒を飲んだ。

聞くところによると、楊梅兼邦卿が老齡からくる病の状況がひどいので、今日出家したそうだ。出家に先立ち、兼邦は従二位にして下さるよう望みを申し上げて、その通りに任命されたそうだ。

定親院と小河大方禅尼の追善供養

十一日、晴。椎野寺主が来たが、すぐにお帰りになった。大光明寺へ参詣しに来たらしい。

今日、相国寺でお経を略読(※)して供養する法会があった。これは、室町殿の養母である定親院十三回忌の仏事だそうだ。また小

河大方禅尼七回忌の供養としても同じくお経を略読(※)して供養する法会があったそうだ。

伏見荘土倉宝泉らの善光寺参り

宝泉がこの十六日に信濃国の善光寺へ参詣するそうだ。そのためしばしお別れのご挨拶として、お酒一献を持参してきた。扇子と羅茶(※)などを与えた。行光と下野良村が一緒に参詣するそうだ。皆がしばしお別れの挨拶を申し立ていた。

※「略読」：原文では「伝経供養」とあるが、これを「転経供養」(お経を略読すること。転読)の誤記と解した。なお、応永二十六年五月四日条には同じく相国寺における「転経供養」の記事がある。※羅茶(らっちゃ)：茶・甘草などの漢方生薬・香木を混ぜて丸状にした酔い覚まし薬である。蠟茶。橋本素子氏のご教示による。

指月庵の大きな蜂の巣

十三日、晴。大光明寺の風呂に入った。

まず指月庵に行った。指月庵の南面の軒に大きな蜂の巣があった。蜂は激しく怒っていて、僧たちが蜂に刺されていた。広時が棹で蜂の巣を打ち落とした。それでも蜂が飛び回っていて、ゆっくり座つてもいられない。そのためすぐに大光明寺へ避難した。ようやく大光明寺地藏殿でのんびりと涼むことができた。地藏殿で干飯や瓜などを食べた。その後、風呂に入ってから帰った。田向三位らも一緒だった。

【頭書】聞くところによると、蜂の巣を打ち落としたこの夜に、さらに大きな巣を蜂たちが作ったそうだ。それで蜂がブンブン飛び回るので、指月庵主らは大光明寺へ行くことができなかったそうだ。不

思議なことである。

念仏とお囃子の仮装行列

十四日、晴。お盆の儀式をいつもの通りにおこなった。石井村の新御堂でも、いつものように念仏のお囃子があった。田向家の侍たちが山伏が背負う笈（おい）を作り、変わった仮装をして石井村へ向かった。舟津や山村などからも仮装をしたお囃子の行列が、いつものように石井村へ繰り出してきた。念仏を唱えながら、お囃子をしていった。石井村へお忍びで見物してきた。

十五日、晴。昼にわか雨が降った。いつものように蓮飯を食べた。大光明寺の施餓鬼を見に行った。宮家の女性たちも同伴し、田向三位らも一緒だった。施餓鬼に参列してから、帰った。施餓鬼に先だって、先祖の廟所前で焼香したのはいつも通りであった。

畠山重保の人つぶて・源為朝の鬼使い

夜に山村から念仏お囃子の仮装行列が来た。畠山六郎重保が由比ヶ浜の合戦で敵兵を石のようにブンブン投げ飛ばす物真似をしていた。また石村の仮装は、源為朝（※）が鬼を使役する様子を表しているという。いずれも面白い仮装であった。お忍びで見物した。舟津の仮装は、勧進僧の物真似であった。

さて夏の間、琵琶の稽古をした。三月三日から今日に至るまで、一日も欠かさなかった。夏の三ヶ月九十日以外にも練習したので、その期間は百日あまりになった。無事に百日間の稽古が終わった。今夜は右方高麗樂の曲を七つ弾いた。

※「源為朝」：原文では「為明」となっているが、源為朝が鬼ヶ島（蘆島）の鬼を支配した伝承（保元物語）のことと解した。

貞成の吉夢

十六日、雨が降った。明け方の夢で、正親町三条公雅大納言が檳榔毛車（※）一両、牛を牛車に固定させる紐二組、そして牛一頭を献上してきた。ずっとお手許に置いてお使い下さいという内容の書状が添えられていた。亡くなった父・大通院がいっしょやって、この手紙をご覧になっていた。という場面で、すぐに目が覚めた。これは官位が高位に達する吉夢なので、記しておく。

宝泉・行光・良村らが善光寺へ旅だった。

※檳榔毛車（びろうげのくるま）：白く晒した檳榔（びんろう。ヤシ科の高木）の葉を細かく裂いて屋形を覆った牛車。上皇以下四位以上の者や女官・高僧などが乗用した。

十七日、明け方から風雨が激しかったが、午前九時頃に止んだ。田向三位が京へ出かけた。この二十二日に豊作を祈念してお供物を捧げるために平野神社へお参りするよう、朝廷から命じられたそうだった。

十八日、晴。田向三位が帰ってきた。豊作祈念の参詣は、来月に延期となったそうだった。かつて建武某年と観応元年（一三五〇）にも、この豊作祈念の参詣が八月に延期されている。国内の騒乱で豊作祈念が延期されるのは、ごく稀なことだそうだった。朝廷を守護する上七社には公卿が、中七社には殿上人が、下七社（※）には四位・五位の役人が、それぞれ朝廷の使者としてお参りするそうだった。石清水八幡宮の放生会には、室町殿が行事担当の責任者になるとのことである。来月二十八日には、称光天皇陛下が上皇御所へ行かれるそうだった。いろいろな世間話を田向三位が話してくれた。

※「下七社」：朝廷を守護する神社は二十二社あり、そのうち「下」

は八社である。

貞成、息子と初めて会う

十九日、晴。吉日なので、我が息子が産所の庭田家から宮家に来た。母親の二条殿も一緒である。一献の祝宴があった。田向三位が息子を抱きかかえて、私に見せてくれた。

二十日、雨が降った。村の男たちが一献の酒を献上してきた。我が息子誕生のお祝いだそうだ。

中国の軍勢が薩摩国に侵攻したという情報

さて聞くとところによると、中国人たちが日本を攻めていて、既に薩摩国に侵攻しているそうだ。薩摩国の武士たちが応戦して、中国人若干名が殺害されたという。一方、薩摩国の武士のなかにも殺された者がいるとのことだ。中国人のなかには、鬼のような姿形の者がおり、人の力だけで攻めるのは難しいという。

また他国の賊兵が乗った八万隻の船が海上に浮いていると豊後国守護である大内盛見にまず連絡が入ったそうだ。九州探題から幕府への連絡はまだ入っていないという。

一方、兵庫にも中国の船が一隻着岸したそうだ。ただしこれは、軍船ではなく、使者の船だという。

兵庫に上陸した中国人使節

二十四日、晴。聞くとところによると、兵庫に来た中国人を京都には入らせなかったそうだ。国書の他に、四つの文字が書かれた札を献上してきた。その文字とは「梵沐桐重」で、これを解読した者はいないそうだ。僧侶や俗人のうちで才能のある人でも読解できなかったとは、理解しがたいことであろう。

一方、薩摩国に侵攻している外国の軍勢は、モンゴル人だそうだ。

二十五日、晴。毎月恒例の連歌会を、即成院善基と小川禅啓の二人が合同の当番幹事として準備した。いつものように一献の酒宴をまず行った。参加者はいつもの通りである。生島明盛が来ていた。

二十六日、綾小路信俊前参議が来た。播磨国国衙領の領地調査の件で、管理者の勧修寺経興より報告することがあるそうだ。その間の事情を報告するために、代理で綾小路が来たという。

土佐将監の妙音天像

さてさる二十日に行われた上皇御所での音楽会では、本尊となる妙音天像を新たに描かせたそうだ。妙音天が箏を弾いている画像で、土佐将監が描いたという。御奉納のために、秘曲も演奏された。曲目は、秘曲の万秋楽と蘇合急・輪台・青海波・千秋楽である。

上皇御所音楽会での演奏者

殿上人の演奏者については、上皇様自らお選びになったそうだ。

演奏者は、今出川公行前左大臣・自ら希望して参加した洞院満季中納言・裏辻実秀中納言・園基秀前参議・山科教豊朝臣・四辻季保朝臣・楊梅兼英朝臣・四辻季俊朝臣らである。四位・五位の楽人たちはほとんど全員が参加した。もしかしたら四位・五位の楽人たちは上皇様にお願ひして参加させてもらったのかもしれない。綾小路前参議はご指名から漏れてしまい、残念でしたと話していた。

二十七日、晴。朝早く音楽会をした。太食調の曲を五つ。綾小路信俊前参議と田向長資朝臣が参加した。音楽会の後、風呂に入った。綾小路前参議は京都へ帰った。

行蔵庵主寿蔵主が一献のお酒を持参してきた。「これは八朔（八

月一日）の贈答品です」と言っていた。

後小松上皇からの八朔返礼

二十八日、晴。冷泉正永が来た。上皇様が昨年のお返しを下さった。冷泉永基がその取り次ぎ役だったので、代理の使者として正永がお返しの品を持って来たのである。練貫（ねりぬき）で織られた上皇様ご自身の服二着と沈香が一包み。この沈香は重さが二十両あって、薄手の雁皮紙に包まれていた。それに引合紙を十帖いただいた。とてもめでたいことである。去年のことをお忘れにならずにいてくださった事は、ことに恐れ多く、またうれしくもある。お返事に添えて、前庭に成っていた梨一籠を上皇様へお目にかけろべく、永基に託した。それを受け取って、正永は戻っていった。

菩提院稚児の阿賀丸

二十九日、晴。八朔の贈答品を取り揃えるのに、かかりつきりだった。阿賀丸が菩提院の稚児となってから初めてやって来た。顔つきなどは寺院の稚児らしく、おとなしくなっていた。

八月一日、雨が降った。「八月になり良い兆しがあつて、たいへん幸せだ、幸せだ」と予祝した。

京都市内の集中豪雨

聞くところによると、京都市内で集中豪雨があり、河原は水であふれ、人家は流されたという。こちら伏見ではたいした雨量ではなく、雨が時々降っただけだった。

後小松上皇様への八朔の贈り物は、茶碗・生けた草花が描かれた大きな香炉・松や岩や柄杓から流れる水などを表現した作り物を打ち付けた銚子提、それに引合紙三十帖で、いつものように冷泉永基

を通して進上した。

室町殿へは酒海・銚子提・引合紙五十帖をお贈りした。室町殿の若君へは青銅製の香炉・燭台・花瓶のセット、それに銚子提・引合紙三十帖をお贈りした。

夜になってお返しが届いた。室町殿からのお返しは練貫の着物三重・金で飾った太刀一振りであつた。若君からのお返しは、銀製の香炉・紫檀の香台・銚子提・引合紙十帖であつた。

伏見宮家内での八朔の贈答はいつもの通りだった。今出川家・三条家・葉室家・冷泉正永・祐譽律師から贈答品があつた。今出川家の家臣からも毎年献上品があつたが、今年は中止させた。また祐譽律師からの贈答は初めての事であつた。その他の者たちからの贈答品は、まだ届いていない。

梨の收穫

二日、晴。今日も京都では集中豪雨があつたそう。勤修寺経興から八朔の贈答品が送られてきた。廊御方が二日頼みの贈答として、いつもの通り一献の酒宴を用意してくれた。前庭の梨を收穫した。宮家の男女が群れ集まって、梨を拾った。とても楽しい様子だった。

三日、晴。相応院主弘助親王へ今年始めて八朔の贈り物をした。お贈りしたのは、青銅製の花瓶・紫檀の香台・銚子提・杉原紙十帖である。お返しがすぐに来た。お返しは、中国風の絵画二枚・青銅製の香炉・紫檀の香台・引合紙十帖であつた。冷泉永基が贈答品を献上してきた。

さて後小松上皇様や室町殿からお返しのであった御服を宮家の皆に配った。私の息子、東御方・廊御方・兄の後妻である上臈・私の妻

である二条局・庭田重有の娘である今参・それに小今参ら女性たち、田向長資朝臣、女官の賀々に配った。すぐに祝宴を皆が用意してくれた。

四日、晴。藤原能子勾当内侍が贈答品を献上してきた。少し酒を飲んだ。

牛飼童の孫石丸・孫高丸

五日、晴。牛飼童の孫石丸と孫高丸が来たので、御前に呼んで対面した。長資朝臣が取り次ぎ役をした。御総(※)と檀紙十帖を与えた。稚野寺主がいらつしやった。

※「御総」：原文では「御房」とある。貞成が乗る牛車の総角の緒か。息子の守り刀

七日、雨が降った。息子の守り刀である宝剣は、崇光天皇以来、他人には見せず大事に伝えてきた品である。今日が吉日なので、息子に持たせることにした。

さて兄の娘である鳴滝殿の稚児が来た。香雲庵主がお迎えに行き、まず藤原能子長橋局のところに寄ってきたそう。長橋局がお会いしたいと言っていたので、お連れしたという。長橋局は引き出物として縫い物の御服一つをこの姪に進上してくれた。その後、鳴滝殿に入ってから初めて伏見宮家に里帰りしてきたわけである。

十一日、晴。毎月恒例の連歌会、今回は稚野寺主殿が当番の幹事である。会場に、妙法院宮堯仁親王直筆で「南無北野天満大自在天神」と書かれた掛け軸を懸けた。この掛け軸は、稚野寺主の守り本尊だ。その両脇には同じく堯仁親王直筆で書かれた漢詩「羅綺重衣」(※)の掛け軸を懸けた。そして座敷を少し整えた。連歌会の参加者は、

私・稚野寺主・田向三位・重有朝臣・長資朝臣・正永・善基・洪珠侍者・周郷・明盛らである。いつものように一献の酒宴をした。

聞くところによると、今日、室町殿が嵯峨から船に乗り石清水八幡宮にお参りしたそう。放生会に参列するためだという。

伏見荘の守護軍事役

さて、三方範忠山城入道から書状が来た。「放生会の警備のため、伏見宮家御領地にいる沙汰人や侍たちを山城国守護の軍勢に繰り入れるため、出動させて下さい」という内容の、幕府事務取扱者による將軍の命令書が出されたという。この事に關して、当方の領地では守護の軍事役を勤める先例がないと回答した。小川禪啓が使者として出かけて、三方にそう伝えたところ、「今回の命令は嚴重なものであり、先例の有無は関係ありません」という。「いずれにしても、將軍様からのご命令なので、幕府の事務取扱者に直接申し入れて下さい。守護代官の私としては判断しかねます」と三方は返答したという。

中国の軍勢

さて去る六月二十六日に中国人の軍勢が攻めてきて、対馬で少貳・大友・菊池らと合戦になったという。それで負けた異賊のうち何人かが打ち殺され、また敵の大將軍二人が捕虜になったという。大風が吹き、そのため中国の軍船の多くが破壊されて海に沈んだらしい。中国の軍船はおよそ二万五千隻だったそう。捕虜になった大將は兵庫に連行された。このような内容の現地報告が今月六日、京都に届いたそう。国家的な大慶事であり、室町殿もお喜びだ。公家も武家も室町御所へ参賀に訪れて、大騒ぎになっているそう。

上皇御所へも同じように参賀の人々が押しかけたという。昨日は、門跡寺院の高僧や撰閑家や大臣らもほとんど、お祝いにかけてくれたそう。末の世だとはいいいながら、すばらしい神様の思し召しであり、不思議なことである。

※羅綺重衣：『和漢朗詠集』管弦四六六。

十二日、雨が降った。双六の総当たり戦（※）をした。私・重有・長資ら朝臣・正永・明盛らが対戦した。懸賞品を出した。負けた者が皆に酒海を提供することにした。対戦が終わってすぐに酒宴をした。私と重有が勝った。

※「総当たり戦」：原文では「廻し打ち」とある。

十三日、雨が降り、大風が吹き、終日終夜、止まなかった。いつものように風呂に入った。

聞くところによると、故萩原殿直仁親王の子である徳光院高西堂がお亡くなりになったそう。

九州探題の報告書

さて、異国の軍勢が攻めてきたことに関して、去る六日に九州探題から報告書が出された。思いがけず、その報告書を見ることができたので、ここに記録しておく。

謹んで申し上げます。

さて六月二十日にモンゴル人と高麗人が連合して、その軍船五百隻あまりが対馬島に攻め寄せてきました。その軍勢が対馬島を征服しようとしたので、我ら大宰少弐の軍勢だけで迅速に対応しました。各港湾の停泊地で日夜合戦をしたところ、敵・味方ともに戦死する者が数え切れないほどでした。

それで耐えきれなくなったので、九州各地の軍勢に加勢を要請しました。同月二十六日には各軍勢が優勢に合戦した結果、異国の軍兵三千七百人余りを討ち取り、斬り捨てました。それ以外に負傷した敵兵の数は分からないほど多いようです。

敵の船で海上に浮かんでいるものは総じて千三百隻余りでした。海賊に命じて夜も昼も問わず攻めさせた結果、彼方此方の合戦で討たれたり、あるいは船から投げ出されて海に沈んだ敵兵の数はとても多かったです。

そのように合戦している最中に、まことに不思議な神仏の靈験が何度もみられました。雨風が吹いて敵の船が震動したりしました。また敵の船に雷がとどろき、あらが降ったりもしました。大変な寒さに手が凍えて武器を持つこともできず、その寒さに凍死する敵兵の数は分からないほど多いようです。

なかでもとりわけ不思議だったのは、味方が苦戦している時に、錦の御旗三流れをひらめかせた大船が四隻、どこからともなく現れました。そのなかで大将と思われる者は女性でした。その女大将の力はとてつもないもので、モンゴル軍の船に乗り移って、敵兵三百人余りを手玉にとって海に投げ入れてしまいました。

敵の大将やその弟など主な戦犯二十八人のうち若干名はその場で処刑しました。残る首謀者七人は当方の判断により京都へ連行します。

二十七日の真夜中過ぎ頃に異国の残兵どもは皆々、退却しはじめました。モンゴル軍の総大将は討死したとの噂ですが、本当かどうかは分かりません。七月二日にはまだ残っていた敵船もすべて

て退却していきました。

このように瞬く間に当方が勝利したのは、すべて神様の威力によるものです。これで將軍様のご運も開け、とてもめでたく、またありがたく存じる次第です。さらに詳しいことは省略しまして、以上のようにご報告申し上げます。

七月十五日 九州探題 持範(※) サイン

末の世の中とはいえ、神様の威力により我が国が守られているのは全く明らかな事実である。この九州探題の報告書は本物であろう。※「持範」…未詳。当時の九州探題は渋川義俊である。

十四日、晴。田向経良三位と田向長資朝臣が石清水八幡宮に向かった。長資朝臣が明日の放生会で警備責任者を勤めるためである。また庭田重有朝臣も同じく石清水八幡宮へお参りに行った。重有は御神輿の巡行を見物するためである。

鹿威しの水車

さて退蔵庵の水車がこの前、新しく造られたそう。この水車は、池から水が流れ出る場所に添水(※)としてお造りなつたそう。昨日の風雨で川の水も大水になっていることだろう。それで、宮家の女中たちも誘い連れて、この添水の水車を見に行ったのである。

※添水(そうず)…流水を竹筒に導き、水がたまるとその重みで筒が傾いて水が流れ出し、軽くなって跳ね返るときに石を打って音を出すようにしたもの。もともと鳥獣駆除のためであったが、庭園などに設けられ、その音を楽しむようになった。鹿威し(ししおどし)。原文では「曾宇津作らる」とある。

十五日、空は晴れて、風は穏やかである。石清水八幡宮の放生会に室

町殿が行事遂行責任者の公卿として参列されたそう。付き従った公卿は八人、殿上人は十五人、衛府の役人は十人、二人一組で十六番に編成された護衛の下級役人は三十二人、さらに六位・七位の先払い役や近衛府の警護官ら、それぞれが皆、華やかに着飾った出で立ちだったそう。参列者の名簿を探し出して、記録しておこう。

今夜は名月なのだが、夜空は曇ってしまい、残念だった。それでも、いつものようにお月見をした。宮家には人がいなかったが、少しだけ和歌を詠んだ。椎野寺主がお寺へ帰った。冷泉正永も京都へ戻った。

十六日、晴。昼にわか雨が降った。田向三位・重有・長資ら朝臣が石清水八幡宮から戻ってきた。放生会は厳めしく執り行われたと言っていた。午前五時に御神輿は社殿を出て、午前十一時に戻ってきた。午後五時にはすべての行事が問題なく無事終わったそう。

太刀の鞘袋をめぐる先例

さて長資朝臣が警備責任者として室町殿に付き従ったのだが、その際、太刀の鞘(さや)を毛皮の袋に収めていた。そのことを、日野資教一位ら面々が批判したそう。五位の役人は鞘を毛皮の袋に収めるが、四位の役人は毛皮の袋に入れるものではないという批判だった。それに対して親の経良卿は反論をして、「最近の例では四位の者も毛皮の袋に収めています。また、このようにするのは田向家の先例でもあります」と主張したという。それに対して、日野ら面々は軽く笑いを漏らしたそう。近衛の将官は誰も毛皮の袋に入っていないそう。とても不審なことだ。先例はどうなのであろうか。

さて伏見莊の村人たちが山城国守護の警護役に従うことは前例がないので、田向三位が守護代の三方範忠の屋敷に向いて、酒代として酒樽などを与えた。警護役を勤めることは難しいという事情を説明したところ、とりあえずは免除してくれたそう。

聞くとところによると、今日、相国寺の塔頭である永寿院が火事になったそう。しかし、他に延焼せず、永寿院だけが焼けたという。

祈念穀奉幣の再興

十七日、晴。豊作を祈念して神社にお供物を捧げる儀式が、今日行われた。田向経良卿は朝廷の命により平野神社に参列した。日吉大社や祇園社などへは、今出川家の家司である三善藤衡が参列したそう。

この儀式は、観応元年（一三五〇）まで行われていたが、その後、中絶していた。この豊作祈念のため供物を捧げる儀式は、大がかりなものだそう。しかし、諸社や諸国で怪異が数多く起こったので、儀式を再興なさったという。

十八日、晴。田向三位が帰ってきて、豊作祈念のため供物を捧げる儀式について話してくれた。この儀式の実行責任者である公卿は、正親町三条公雅新大納言と久我清通中納言、参議の役は武者小路隆光と中御門宣輔、事務取扱者は勧修寺経興蔵人頭兼左中弁であった。

石清水八幡宮へは久我中納言が参列したそう。放生会の参列者名簿を、このほど見る事ができたので、記しておく。

公卿の責任者は室町殿足利義持内大臣、参議別当の役は裏松義資、事務担当者は東坊城長政少納言、警備責任者は長資朝臣と白川雅兼

朝臣、事務取扱者は勧修寺経興朝臣である。

室町殿に付き従った公卿は、広橋兼宣大納言・木造俊康大納言・中山満親大納言・日野有光中納言・久我中納言・徳大寺実盛中納言・万里小路時房中納言・裏松義資検非違使別当（※）。殿上人は、高倉永藤朝臣・飛鳥井雅清朝臣・山科教豊朝臣・長資朝臣・松木宗継朝臣・四条隆夏朝臣・白川雅兼朝臣・六条有定朝臣・東坊城元長朝臣・園基時朝臣、日野秀光・広橋宣光・房長・慈光寺持経極臈だそう。

鳴滝の御稚児が宮家へ里帰りされた。香雲庵主がお供してきた。特に引き出物二種類として青銅製の香炉と引合紙十帖を献上してきた。また別にお土産としてお酒なども献上してくれた。

※「裏松義資検非違使別当」：原文では「別当」とあるのみ。これを検非違使の長官である別当と解した。義資はこの時、参議である。十九日、雨が降った。雨を止めるお祈りのため、神社にお供えを献上する儀式が行われた。この行事の実行責任者の公卿は、今出川実富大納言だそう。

来たる二十一日に称光天皇陛下が上皇御所へお渡りになる件で、長資朝臣が警備責任者を勤めるよう、朝廷から強制的に命じられているそう。

さて、放生会執行責任者として見事勤めを果たされたことや異国の軍勢を退けて平和が保たれたことなど、いずれもめでたい事であると、清原常宗を通して室町殿へお祝いを申し上げた。

称光天皇、上皇御所へ行く

二十一日、晴。今日、称光天皇陛下が上皇御所へお渡りになった。お

供した公卿は、室町殿足利義持内大臣・西園寺実永大納言兼右近衛大将・広橋兼宣大納言・二条持基大納言兼左近衛大将・三条公光大納言・三条公雅新大納言・裏辻実秀権大納言・日野有光中納言兼上皇院庁執権・万里小路時房中納言・武者小路隆光参議・三種の神器である剣・勾玉を運ぶ役の三条公頼参議兼近衛中将・裏松義資検非違使別当、高辻長広少納言。事務担当者の勧修寺経興朝臣。

左近衛府の警備責任者は飛鳥井雅清朝臣・中山定親朝臣・松木宗継朝臣・四条隆夏朝臣・白川雅兼朝臣・基平朝臣・園基世（ただし後に右近衛府の方へ変更となった）。右近衛府の警備責任者は山科教豊朝臣・楊梅兼英朝臣・田向長資朝臣・六条有定朝臣。左衛門府の房長・右衛門府の元長朝臣、左兵衛府の時基朝臣、右兵衛府の永藤朝臣。蔵人の柳原行光朝臣・勧修寺経興朝臣・広橋宣光・慈光寺持経・五辻重伸・岡崎範景、役人の中原章郷、邪気を祓う役の陰陽師である土御門泰継朝臣。

さて事務担当者の役は葉室宗豊左少弁が務めるはずだった。ところが急に交替させられ、当日になって勧修寺経興朝臣が事務担当者になったそう。そのため、宗豊はお供の行列に顔も出さなかった。その事情は、宗豊の事務がもたつて、永藤朝臣に対して出仕の命令を出すのが遅れたことにあるようだ。そして、このことを宗豊の失態として、永藤が室町殿に告げ口をしたらしい。そのため、室町殿は宗豊の事務取扱が未熟であると仰って、当日になって経興に改めて事務担当をお命じになったそう。

九条満教関白の足利義持に対する遠慮

午後七時前に天皇陛下のお出ましがあつた。ところが、九条満教

関白はお供しなかった。その代わり、内大臣の室町殿がお供をした。内大臣の行列には近衛府の護衛官七人が付き従つていた。このような護衛官のありさまは、放生会の時と同様だったという。その内大臣が天皇陛下の御裾やお履き物を持つ役を務めたそう。先例では、関白が御裾を取る役を務めていた。お履き物を持つのはだいたい蔵人頭が務める役であつた。大臣がお履き物を持つ役をしたという先例があるのどうかは疑問である。内大臣である室町殿がこの二つの役をやるに仰つたので、九条関白は遠慮して欠席したのであろう。

天皇家内輪の音楽会

内侍のうちでは、藤原能子勾当内侍がただ一人、陛下のお側にお仕えし、上皇御所内で三種の神器である剣・勾玉を持ち運ぶ役も兼ねたそう。今夜はすぐに母である日野西資子二位殿のお部屋に陛下はお出でになった。そこで明け方まで一献の酒宴をして、内々に音楽会をなさつたそう。陛下は御筈、上皇様は御笛、弟の二宮は御箏をそれぞれ演奏されたそう。侍臣は参加しなかった。内裏の女性たちのうち、上臈典侍・大納言典侍・勾当局・播磨局が参加していたが、それ以外の者は誰も参加しなかったそう。

舞の天覧

二十三日、晴。今日は舞をご覧になった。舞樂の曲目は、以下の通りである。

楽人入場の曲として万秋楽破（二曲あり※）、その後左・右交互に、春鶯囀・新鳥蘇・秘曲の蘇合・進走徳・打毬楽・垣破・青海波（垣代（※）あり）・八仙・傾坏楽・胡徳楽・太平楽・狛梓・河南浦・綾切・陵王・落蹲・追加の曲で秋風楽・白浜・五常楽・地久・

楽人退出の曲として長慶子。

演奏者

笙

山科教有朝臣・同教豊朝臣・四条隆盛朝臣・松木宗継朝臣・豊原藤秋・同氏秋・同為秋・同家秋・同幸秋・同郷秋・同敦秋・同葛秋・同村秋・同遠秋・同久秋・同高秋・同継秋・同興秋
筆策

楊梅兼英朝臣・同兼豊朝臣・安倍季長・同季久

笛

大炊御門信経前中納言・洞院満季中納言・徳大寺実盛中納言・中山定親朝臣・山井景房・同景親・同景清・同景勝・同景藤・同景興

琵琶

今出川公行前左大臣・園基秀前参議・孝長朝臣・園基世

箏

裏辻実秀権中納言・四辻季保朝臣・同季俊朝臣・簾中（※）

舞人 左

伯正葛・同英葛・同忠葛・同藤葛・同葛躬・同葛衡

右

多忠興・同久乙・同忠信・同忠国・同忠清・同忠右

見所座（※）

三条公光大納言・同公雅新大納言

陵王の舞人に対すご褒美は、内大臣がお渡しになった。ただし内大臣ご自身はご欠席であった。そのために御簾の中から内大臣のお側に仕える者が褒美の品を持ち出して、舞人に渡した。納曾利の

舞人二人には、今出川前左大臣と三条大納言がご褒美を手渡した。

青海波は、舞人たちだけで垣代を立てた。

音合わせで音を吹き渡したのは、笙担当の藤秋・笛担当の山井景房・筆策担当の季長だった。琵琶で音合わせをする者はいなかった。前もって作られた演奏曲の目録には、還城楽があった。しかし、これを舞える則宗が病気になるってしまったので、急遽、還城楽の演奏は中止になった。それで、その替わりに河南浦が演奏されたそう
だ。

※「一曲あり」：「万秋楽破」に付された割注であるが、未詳。

※垣代（かいしろ）：舞台の南側に円陣を作り、笛を吹いたり、拍子をとったりする人たちのこと。

※「簾中」：簾の中で誰が箏を弾いていたのか未詳。

※「見所座」：未詳。

二十四日、雨が降った。上皇御所で、内々の歌会があった。今夜、天皇陛下は別当局の部屋に行かれたそう
だ。

金翅鳥による地震

午後五時に地震があった。この地震は、金翅鳥（※）が動いたためらしい。

さて播磨国国衙領の領地調査に際して、まずは錢三十貫文を伏見宮家へ納めますと事務担当者から連絡があった。めでたいことである。私が伏見宮家の当主となって領地調査を実施できることになったのは、めでたいことであり、うれしい限りである。先例では、この国衙領からは総計錢三百貫文ほど納税されるよう
だ。

さて善光寺に参詣していた者たちが、今日無事に戻ってきたそう

だ。参詣者の一人行光がこの霊地のことなどを話してくれた。

※金翅鳥（こんじちょう）：仏教における想像上の大鳥。翼は金色で、口から火を吐き、竜を好んで食うという。迦楼羅（かるら）ともいう。

二十五日、晴。午後七時に称光天皇陛下が上皇御所から朝廷へお戻りになったそう。内大臣や左大将・右大将はお供しなかったらしい。二十七日、晴。今日はお彼岸の初日である。いつものように身を淨めた。

香雲庵へ盗犯侵入

聞くところによると、香雲庵に盗人が侵入して、塗籠（※）の中の物品を盗んでいったそう。その時、庵主は庵を留守にしていた。庵の内部に手引きした者がいたことは間違いないだろう。

※塗籠（ぬりごめ）：土などを厚く塗り込んだ壁で囲まれた部屋のこと。寝室や貴重品置き場に使われていた。

二十八日、晴。夕方、にわか雨が降った。播磨国国衙領の土地調査に伴い納税金が送られてきたので、祝宴を開いた。とりあえずの収入なので、宮家の男女にはこの錢を配分しなかった。

さて今出川公富中納言が今日、父から琵琶の秘曲二曲を伝授されたそう。兄の実富大納言は琵琶の練習をしないので、父親の公行前左大臣は快く思っておらず、実富にはまだ伝授していない。弟の公富に先を越されて、兄としては無念に思っていることだろう。

聞くところによると、四条隆信前中納言が亡くなったそう。三十日、晴。お彼岸の中日である。いつものように身を淨めた。八朔のお返しのお品をすべて、皆に分け与えた。